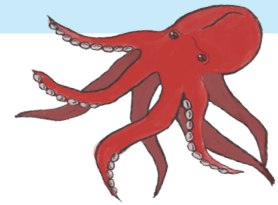




神輿を先導する猿田彦：齊藤満天

無茶々園事務所のある狩浜地区では 10 月の第 4 土曜日に秋祭りが行われます。地域の人々が神輿をはじめ巫女の舞、牛鬼や五つ鹿、御船、相撲練りなどの役割を担いますがその中の一つ、神輿を先導する「猿田彦」は代々神社に奉仕する家（宮烏：みやがらす）から男子一人が選ばれます。12年前よりこの役を引き継いだ齊藤満天さんに寄稿いただきました。

蛸伝説



「食事は家族と別々に食べ、風呂は一番に入り、神社で寝泊まりし、神様の役を務めるため身を清める。（諸説あり）」祖父の代までは続けていたという風習だ。齊藤家は秋祭りにおいて、猿田彦の役を代々担っている。先達（せんだち）とも呼ばれ、神輿の前に行く案内役だ。近頃はワンデイゴッドなんて呼ばれたりもしている。狩浜の祭りの花形であろう牛鬼や神輿と比べるとあまり目立たないが、「先達がおらんと祭りが始まらん」と言う人もいるくらい重要な役である。齊藤家が先達を務めるようになった所以は、狩浜の古くからの言い伝えにある。諸説あり、曖昧な表現も多々ありのなか、「ふるさとの伝説（狩江編）」と言う資料に比較的詳しく記されているものがあった。方言、古い言葉を少し直した原文に、注釈や補足、考察を交えてご紹介したいと思う。

（以下「」内ふるさとの伝説（狩江編）より引用、参考）

「春日神社はな、霊験あらたかで多くの人々から崇拝されとった。また御神体が値打ちもんなんよ。銭金言わずに奈良から勧請した（移した）だけに、立派なものじゃ。あんまり評判がたかいから困ったことが起きたんじやろうのう。ほんとにいけんやつがおってな、御神体を上方に売ろうと思って、夜遅くに神社から盗んでしまったんよ。」

春日神社は本浦区と枝浦区に挟まれた場所にあり、目の前には海が広がっている。（地図参照）盗人は集落の目につかぬよう海からの逃亡を図る。



「盗人はちょっとでも早く逃げようとして無茶苦茶に船を漕いで帆を張ったんじゃ。ところが悪いことはできんもんぜ。はじめから帆も役に立たんほどの海がだんだんと時化だして、日振（地図参照）の沖からは大時化じゃ。そういう時は帆を下ろすもんじゃが、それさえできん大時化じゃから、傾いたまま飛ぶように走るんよ。こりゃ神罰に違いねえ。盗人は『もとの神社にお返しします。』と一心になってお祈りしたようじゃが、もうこうなったら遅いわい。」

狩浜から日振島まで直線距離で 20km 以上ある。当然エンジンなどない時代。時化始めた海は真っ暗で帆も役に立たない。そんな状況でひたすら、ろをこいで逃げたと考えると盗人の根性にも目を見張る。盗人の生死は定かでないが、別の資料には命からがら逃げ延びたこともある。この一連の逃走劇に関しては、目撃者はおそらくいないであろうし、まさか盗人本人が狩浜に凱旋して語ることもないであろう。この辺りはフィクションの割合が高いのではないと思われる。さて、盗人はいいとして、御神体は一体何処に？話しは少し離れた佐田岬半島に移る。ノ

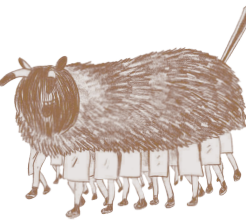


「その翌朝のことじゃ。三崎の名取（地図参照）の人が浜に出て『ゆうべの風はすごかったのお』と話し合っとった。その目の前で、蛸が何やら頭の上に捧げるように泳いで、汐べりにそれを置いたと思ったら、もう海の中じゃった。ほんのわずかのことよ。みんなあっと思ううちに近寄ると、驚いたことに『これは、どこかの御神体に違いねえぞ！わしらに祀れということかもしれん。』御神体を岩の上に置いて、みんなで石を集めだした。平べったな大きな石を屋根にしてその奥に納めたんじゃ。ありがてえことよのう。」

なんと日振島あたりからさらに 20km 以上離れた場所、名取地区で御神体は見つけられた。先ずは名取の人たちに感謝しなければならない。盗む人がいるほど値打ちのあるものだ。悪いことが頭によぎるかもしれない状況で、良くぞ健気に祀ってくれたものだ。名取ではなく別の場所で見つかったという資料もあるが、なんにせよ " 蛸が御神体を海から運んできてくれた " のことが共通する部分であり、言い伝えの最も重要な部分である。蛸のお手柄と名取の人たちの厚意により御神体は無事祀られた。その頃狩浜の村は…

「狩浜じゃ神社が荒らされてるんで大騒ぎじゃ…八方へ手配りして探した、探した。『名取の浜にどこかの御神体が祀ってある。』と聞いて船を仕立てて飛んでいったら、本当にそうじゃった。名取の人は親切にしてくれてのう、細かに教えてくれたんじゃ。行った連中は喜んでのう。白木綿にくるんで大事にして浜へ船をつけたんよ。長老が海に入って赤ん坊を負う格好で背を向けたら船の中から無言で背中へ載せた、と。あとも見ずに、神社に続く坂、石段を飛ぶようにして御殿に納めたそうな。」

祭りは生活の一部



移り変わる時代の中で、次の世代へと代々続いてきた祭りは、その土地のコミュニティや文化を形成する上で大切な役割を担ってきました。

やっぱり、「祭りがここにある」ということは、「ここに住んでいてなんぼ」という部分もあります。祭りの当日だけ外から参加してもらうのももちろんありがたいけれども、ここに住んで地域の産業に携わりつつ、お祭りもやるのが本来の姿ですから、そこに対する葛藤はあります。いずれは移住者が増えて、「地域で生きていく」上で祭りがあるようになっていけば一番嬉しい。

祭りとは神輿担いでワッショイワッショイの派手な部分だけではなく、多くの準備があり成り立ってます。その多くの準備が大変です。町外から嫁に来てビックリしたのが何より準備を含めた「祭り」だったのだから。秋の夜長の針仕事はその中の一つ。練りの一つである牛鬼の足袋の底を補強する為に足袋に厚手の布を縫いつけます。しばらくぶりに押入れから裁縫箱を出し、針の穴に糸を通してははず…なのに、針のすぐ横を素通りしてしまうのであります。焦りつつも何度か試みて、ようやく糸と針は一体に。昔々の母の姿を思い浮かべながら、しばしの針仕事に励むのです。

御神体は無事、春日神社に戻された。めでたしめでたし。それ以来狩浜では蛸は神聖な生き物とされ、食べることはなくなつた。現在でもその風習を守っている人もいる。この話の中に齊藤の文字は出てこないが、齊藤家は " 盗まれた御神体を神社に戻したことから先達を務めることになった。" と言われている。短絡的な想像なのだが、最後に登場する " 行った連中 " もしくは " 長老 " が齊藤家だったのかもしれない。

言い伝えや風習、文化などは壮大な伝言ゲームで、生き物のようにも思える。僕は狩浜という大きな生き物の一部として生きているとも言える。生かし続けたい。と思う。



【参考資料】

・ふるさとの伝説・明浜こぼれ話・狩浜のくらし

この針仕事が一番嫌なことで、夫、長男、二男とチクチクと何年も縫って来ました。

コレをやったら何かもらえる！とかでは無く「しゃ～ない」とか「決まりだから」と利害無しの曖昧なことで成り立っている。多分、他にも「めんどくさい」って思っている人もいるはずだ。言葉にすると何とも言い表せない「曖昧な関係って大切な事ですよね」などと何だか答えのわからない事を思いつつ、地元の行事には、出来る限り見学者ではなく関係者でいたいと思っています。

祭りは舞だけで成り立つものではないということ。舞だけが受け継がれても、村での祭りの維持ができないと続けていけない。いかに文化を受け継ぎ続けるか。伝統を絶やさないために、どのような工夫ができるのか。村の中の人間は高齢化が進んでいて、どう村の外の若い人たちと祭りを続けていけるかが課題なのです。

川越江身子



今年のみかんは 非常事態宣言

柑橘の本番となる晩秋ですが、今年は非常事態といって良いほどの不作になりそうな滑り出しとなっています。

10 月になれば極早生みかんの収穫がはじまり、いよいよみかんのシーズンに入った高揚感が出てくるのですが、いつものような収穫が得られずにどうも活気が出てきません。みかんの樹を見てみれば枝葉が賑わういっぽうで肝心の果実は少なく、いかにも不作年といった様子。柑橘栽培の現場では強い危機感を感じる年となっています。

無茶々園でも毎年の収穫量を見越して販売を計画していますので、春先、開花後、収穫前と収穫量の見込み数を生産者から集計しているのですが、数字を取り直すたびに見通しが暗くなり、久しぶりの大不作を迎えようとしています。



事務局と生産者で園地の確認も行いました

不作を招いた昨年の干ばつ

なぜ今年は大不作になっているのか、少し柑橘の生育の仕組みから見ていきます。おおざっぱに言えば、みかんは今年果実が成った場所には翌年は成らない性質があり、今年の果実と、来年に果実がなる枝（母枝といいます）を同時にバランス良く育てることで、毎年安定した収穫が実現します。言葉にすると簡単なのですが、実際には花（果実）に傾いたり、新芽（母枝）に傾いたり、生理状態によって樹の方向性が変わってきます。天候などの要素も大きくかわってくるため、これをうまく制御するのはなかなか大変なのです。

一年前にさかのぼると、昨年はもともと果実の数が多い豊作年になっていました。そこにやってきたのが9月から11月はじめの降水量が平年の1割程度となる長い干ばつ。球数が多いうえに植物の命を支える水の供給が少なくなり、樹にかかる負担は極大に。こうして次の年につなげる余力が少ない状態となっていました。

一方、今年にはいと冬は暖かく、春には雨がよく降り、弱っていた樹勢は急速に回復しました。これは樹にとっては良いことなのですが今年の果実に限って言えばマイナス。開花時には花がしっかりあったのですが、旺盛に伸びる新しい芽に養分を分配し、幼果を養いることができなかったわけです。

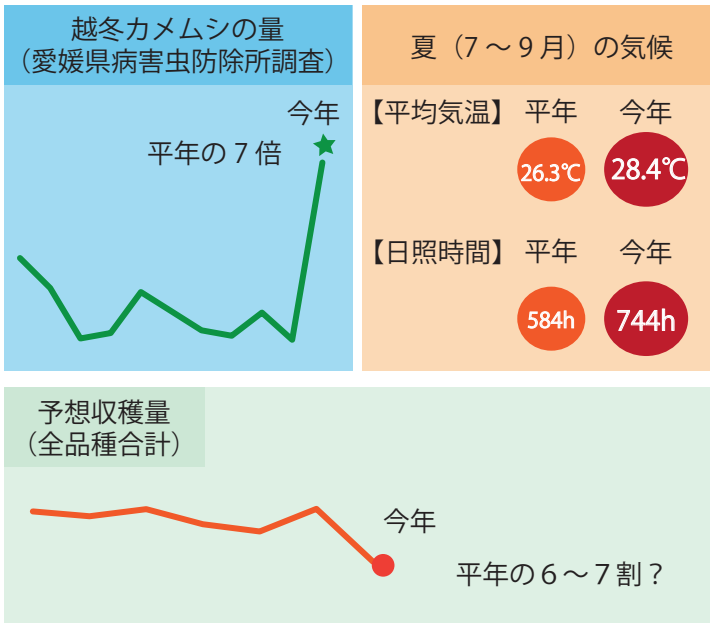


実は少ないが芽はたくさん芽吹いていた

不作を助長したのはカメムシか？

もう一つ原因として考えられるのはカメムシの大発生。カメムシ被害といえば秋のみかんへの食害だったのですが、今年はずっと違う発生の仕方でした。カメムシも近隣のヒノキ林の豊凶に発生数が左右され、まず昨夏の新成虫が多い状態でした。夏に生まれて翌夏まで生きるカメムシは冬の寒さで一定数に抑えられるものですが、昨冬は気温が高くて越冬しやすい環境に。愛媛県では越冬カメムシの定点調査を行っていますが、何と平年の約7倍の越冬量だったそうです。

春先から夏にかけて、大量の越冬カメムシがみかん畑をウロウロして幼果をかじりながら食いつないでいました。これまでに経験のないことで農家も手をこまねいていたのですが、どうも花や幼果を加害されると果実の落下を助長するようで、春先にはそれなりに花を咲かせていた樹も夏には寂しい様相へと変わってしまいました。



弱り目に祟り目

追い打ちをかけるように、この夏の酷暑と日照りは日焼け果を大量に発生させました。また周りの自然環境にも餌となるものがないのか、イノシシやカラスなどの野生動物の襲来もとどまるところを知りません。この数年のバランスの悪い極端な気候変動が柑橘を直撃する結果となり、三重苦四重苦のつらい収穫期となっています。ノ



野生動物が食い荒らした跡

今季の柑橘

せっかく収穫の秋をむかえた今年の柑橘ですが、改めて、残念ながら作柄はとても厳しくなっています。全体的には昨年よりも大幅に収量が落ち込むことは確実ですが、品種によってもやや状況は変わってきます。年内の温州みかんは少ないもののまずまずありそうですが、年明けからの中晩柑はより厳しい状況です。特に不知火あたりは極端な不作になっています。

しかし、なぜだか調子の良い品種もあり、レモンはよく成っています。温暖化に適しているのか、それともカメムシが好まないのか。少なくともイノシシやカラスに食べられることはありません。そのまま果肉を食べるには不向きですが、人間にしか味わえない？果汁や香りを楽しんでいただければと思います。

新しい出荷施設の建設がはじまっています

昨年11月の天歩にてご案内した新しい出荷施設について、いよいよ建設がスタートしています。不作のなかで間の悪さも感じるのですが、無茶々園にとっても長い時間をかけて進めてきた大きなプロジェクトが現実になります。

いま運用している共同選果場の施設や設備が老朽化していること、またジュースをはじめとした加工品の開発が進んで、倉庫に求められる機能が変わっていることから、新しい出荷施設が必要となっていました。計画作りは昨年までに進めていましたが、今年農林水産省の事業を活用して一部の補助もいただき、来春を目標に建物の建設と新しい選果設備の導入を行います。



地鎮祭の様子

来年、再来年へ向けて

果実は春に咲いた花からしか取れず、これから新しく種をまいて作りなおすことはできません。今期は非常事態ですが、時を巻き戻すことはできないのです。いまできることは来年以降に隔年結果のサイクルに陥らないこと。このままいけば来年は花が多くなり、母枝ができなければ大豊作となる可能性があります。この冬は剪定に、来年は摘果にしっかり取り組んで、果実を抑制する作業が大事になります。来年は再来年のために働く年とも言えます。

今年はコメがお店の棚に並ばなくなるなど、農家の減少に気候変動が追い打ちをかけて、農産物や食べ物がいつでも好きなように手に入るのは難しくなってくるのかもしれない。いずれにせよ今期は消費者の皆さんにもいつものように十分な柑橘をお届けできない可能性もあります。何より収穫量が生活に直結する生産者にとっては大変に厳しい一年。お互いに我慢の年になります。



7月には地鎮祭も行い、建物の建設がはじまりました。いま3か月が経って倉庫の鉄骨や屋根をくみ上げる段階まで進んできました。建物は今年中にはほぼ建て終わり、年明けからは内部の設備工事や機械類の設置に移っていきます。



建設の様子(10月)



完成イメージ図